

「被服」分野における児童の家庭生活の 実態についての研究

特に家庭科学習における未習学児童と既習学児童との相違

清水 歌・瀬戸口 孝子
下 神 裕 子*・川 上 康 子**

Actual Home-living of the Children in the Field of "Clothing"

Difference between unlearning and learning school-children
in homemaking education

Uta SHIMIZU, Takako SETOGUCHI,
Hiroko SHIMOGAMI and Yasuko KAWAKAMI

Received May 2, 1974

I 緒 言

小学生が家庭科で学習する内容を、どの程度、日常家庭生活において実践しているかを、家庭科を学習しない児童と家庭科を学習している児童について知ることにより、家庭科教育のあり方を再検討するための一資料として役立てることを目的として行ったものである。本研究が、家庭科教育研究及びその発展の一助となることを願うものである。

なお、本報では、「洗たく」「アイロンの使用」「しみ抜き」「繕い」について報告する。

II 調査の方法

1. 調査地域とその概況

(1) 調査対象 京都教育大学附属京都小学校・同附属桃山小学校。未習学児童として4年生、既習学児童として6年生を選び、男・女児童総数383名である。

(2) 調査時期 昭和48年9月17日～10月17日

(3) 調査方法 質問紙法と若干の聞き込み調査法とを併用した。質問紙法は、1学級を単

注) *旧姓加納 **旧姓井上

位とし、調査員が質問用紙を配布し、本人にその場で記入させた。回収率・有効率ともに 100 %である。

(4) 質問事項 家庭科学習内容（「被服」分野）の中から、児童の日常家庭生活に関係の深いと思われるものを選出し、次の 4 項目とした。

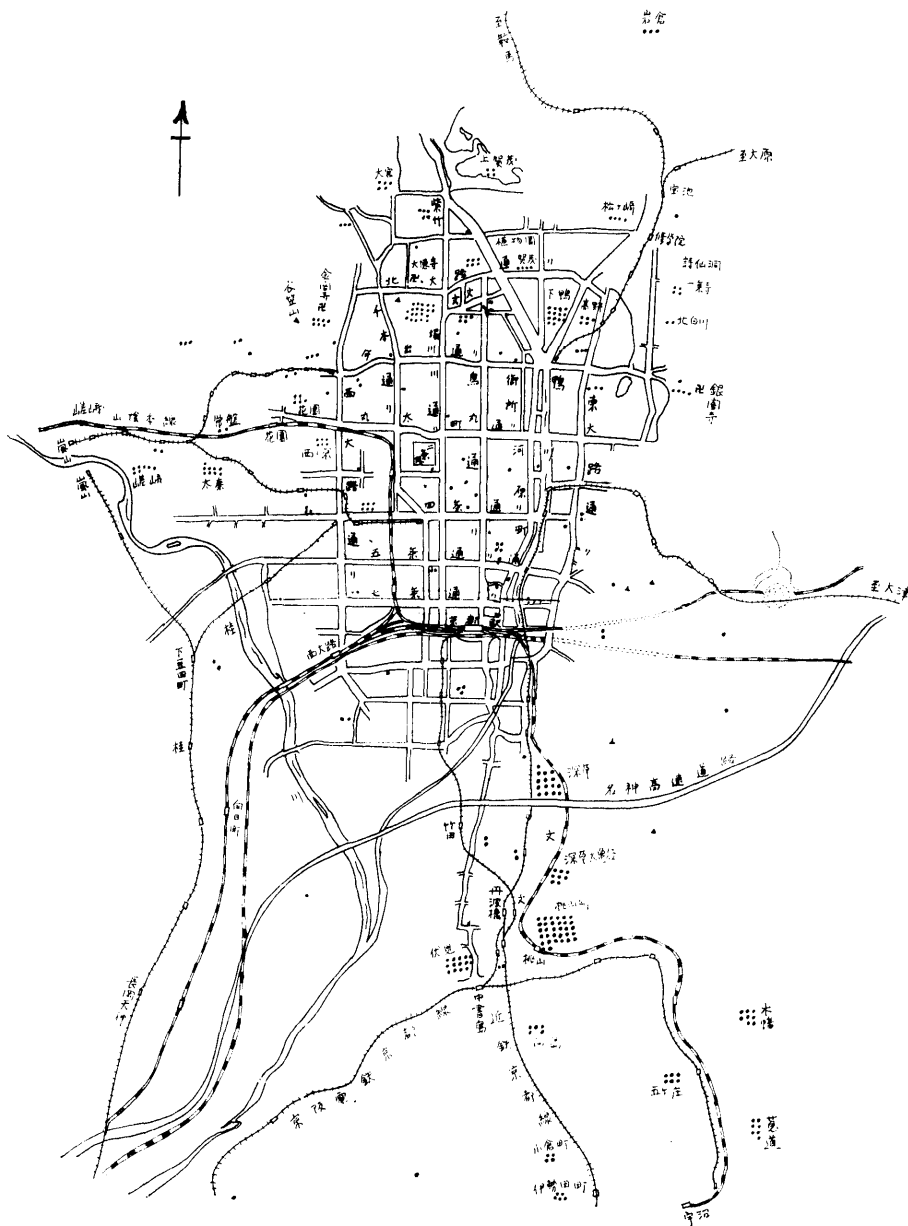


図 1 被調査者の居住分布

- ① 洗たく ② アイロンの使用 ③ しみ抜き ④ 繕い

(5) 被調査者の概況

① 居住地 図1に示すような分布であるが、この他に29名が城陽市・長岡京市・綴喜郡・枚方市に分布している。

② 家族構成 両親のそろっている核家族が最も多い。(表1)

③ 家族人数 4人が最も多く、次いで5人・6人の順である。(表2)

④ 主婦の年齢構成 36～40才が最も多く、次いで31～35才・41～45才の順である。(表3)

⑤ 主婦の職業の有無 無職が最も多く、有職者は非常に少ない。(表4)

⑥ 家庭の職業 会社員が最も多く、公務員・教員をあわせると、いわゆる給料生活者は全体の60.3%となる。(表5)

以上のことから、今回の調査地域は、住宅地域¹⁾に属するとみなすことができる。

表1 家族構成

()は%

項 目	未習学児童	既習学児童	合 計
I I O	19 (10.0)	13 (6.7)	32 (8.4)
O I O	42 (22.2)	43 (22.1)	85 (22.2)
O O O	0 (0)	2 (1.0)	2 (0.5)
I O O	0 (0)	1 (0.5)	1 (0.3)
O X O	0 (0)	0 (0)	0 (0)
I X O	0 (0)	0 (0)	0 (0)
I O	126 (66.7)	131 (67.5)	257 (67.1)
O O	2 (1.7)	4 (2.0)	6 (1.7)
合 計	189 (100)	194 (100)	383 (100)

表2 家族人数

()は%

人 数 (人)	未習学児童	既習学児童	合 計
2	0 (0)	1 (0.5)	1 (0.3)
3	20 (10.6)	24 (12.4)	44 (11.5)
4	79 (41.8)	77 (39.7)	156 (40.7)
5	49 (25.9)	51 (26.3)	100 (26.1)
6	30 (15.9)	32 (16.5)	62 (16.2)
7	10 (5.3)	8 (4.1)	18 (4.7)
8	0 (0)	1 (0.5)	1 (0.3)
9	1 (0.5)	0 (0)	1 (0.3)
合 計	189 (100)	194 (100)	383 (100)

- (注) I I O 祖父母・両親・こども
 O I O 祖父又は祖母・両親・こども
 O O O 祖父又は祖母・片親・こども
 I O O 祖父母・片親・こども
 O X O 祖父又は祖母・こども
 I X O 祖父母・こども
 I O 両親・こども
 O O 片親・こども

表3 主婦の年齢構成 ()は%

年 令 (才)	未習学児童	既習学児童	合 計
21～25	0 (0)	0 (0)	0 (0)
26～30	5 (2.6)	0 (0)	5 (1.4)
31～35	62 (32.8)	30 (15.5)	92 (24.0)
36～40	85 (45.0)	104 (53.6)	189 (49.3)
41～45	32 (16.9)	51 (26.3)	83 (21.7)
46～50	4 (2.1)	3 (1.5)	7 (1.8)
50以上	0 (0)	0 (0)	0 (0)
無 答	1 (0.5)	6 (3.1)	7 (1.8)
合 計	189 (100)	194 (100)	383 (100)

表5 家 庭 の 職 業 ()は%

職 種	未習学児童	既習学児童	全 体
教 員	16 (8.5)	20 (10.4)	36 (9.4)
会 社 員	86 (45.5)	68 (35.1)	154 (40.2)
医 者	7 (3.7)	10 (5.2)	17 (4.4)
公 務 員	18 (9.5)	23 (11.9)	41 (10.7)
農 林 業	2 (1.1)	0 (0)	2 (0.5)
サービ業	1 (0.5)	0 (0)	1 (0.3)
自 営 業	42 (22.2)	26 (13.4)	68 (17.7)
技 術 家	4 (2.1)	5 (2.6)	9 (2.3)
無 職	2 (1.1)	0 (0)	2 (0.5)
そ の 他	7 (3.7)	1 (0.5)	8 (2.1)
無 答	4 (2.1)	41 (21.1)	45 (11.7)
合 計	189	194	383

表4 主婦の職業の有無 ()は%

主婦の職業	未習学児童	既習学児童	合 計
就 職	25 (13.2)	23 (11.9)	48 (12.5)
内 職	6 (3.1)	1 (0.5)	7 (1.8)
自 営	18 (9.5)	14 (7.2)	32 (8.4)
無 職	139 (73.5)	117 (60.3)	256 (66.8)
無 答	1 (0.5)	39 (20.1)	40 (10.4)
合 計	189 (100)	194 (100)	383 (100)

III 結果とその考察

1. 洗たく

(1) 「洗たく」の経験・頻度 未習学児童・既習学児童ともに、「時々する」が最も多い。「ぜんぜんしない」ものと、「めったにしない」ものとをみると、未習学児童では、「ぜんぜん

しない」ものが「めったにしない」ものよりも多く、既習学児童ではその逆である。これは既習学児童は、5学年の9月に「洗たく」を学習しているので、その影響をうけて「ぜんぜんしない」ものが減少しているのではないかと推察される。(表6) なお「洗たく」の経験の有無と家族構成・主婦の職業との関係を見るに、家族構成では、未習学児童・既習学児童ともに、核家族がもっとも多い。経験の有無について両者を較べてみると、未就学児童では、 $\frac{A}{A'} = \frac{a}{b} = \frac{112}{100}$ 、既就学児童では、 $\frac{B}{B'} = \frac{a}{b'} = \frac{132}{100}$
 $\therefore \frac{a}{b} < \frac{a'}{b'}$ すなわち、核家族においては、既習学児童のほうが未習学児童より実践率が高い。(表7) 主婦の職業については、未習学児

表6 「洗たく」の経験・頻度 () は%

項 目	未習学児童	既習学児童
ア. よくする	19 (10.1)	18 (9.3)
イ. 時々する	86 (45.5)	85 (43.8)
ウ. めったにしない	35 (18.5)	51 (26.3)
エ. ぜんぜんしない	49 (25.9)	39 (20.1)
オ. 無 答	0 (0)	1 (0.5)
合 計	189 (100)	194 (100)

表7 「洗たく」の経験の有無と家族構成

() は%

数字は指数

項 目 家族構成	洗たくをする		洗たくをしない		未 習 学 児 童		既 習 学 児 童	
	未 習 学 児 童 (A)	既 習 学 児 童 (B)	未 習 学 児 童 (A')	既 習 学 児 童 (B')	する(a)	しない(b)	する(a')	しない(b')
I I O	11 (7.9)	9 (5.8)	8 (16.3)	4 (10.3)	49	100	56	100
O I O	32 (22.9)	31 (20.0)	10 (20.4)	12 (30.8)	112	100	65	100
O O O	0 (0)	1 (0.6)	0 (0)	1 (2.6)				
I O O	0 (0)	1 (0.6)	0 (0)	0 (0)				
O X O	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
I X O	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
I O	96 (68.6)	110 (71.0)	30 (61.2)	21 (53.8)	112	100	132	100
O O	1 (0.7)	3 (1.9)	1 (2.0)	1 (2.6)	35	100	73	100
合 計	140 (100)	155 (100)	49 (100)	39 (100)				

(注) 「しない」を100とする

童・既習学児童ともに「無職」が多く、未習学児童では、 $\frac{A}{A'} = \frac{a}{b} = \frac{108}{100}$ 、既習学児童では、 $\frac{B}{B'} = \frac{a'}{b'} = \frac{80}{100} \therefore \frac{a}{b} > \frac{a'}{b'}$ すなわち、未習学児童のほうが実践率が高い。(表8)しかし、実践の頻度をみると、未習学児童においては、「めったにしない」が約半数を占めている。また「時々する」では、既習学児童(46.2%)は未習学児童(20.9%)より多く、既習学児童のほうが実践率が高い。なお、「就職」については、未習学児童では、 $\frac{A}{A'} = \frac{a}{b} = \frac{74}{100}$ 、既習学児童では、 $\frac{B}{B'} = \frac{a'}{b'} = \frac{167}{100} \therefore \frac{a}{b} < \frac{a'}{b'}$ すなわち、既習学児童のほうが実践率が高い。これは、職業に従事している主婦の家庭では、結果的に児童が分相応に家事作業の一部を担当し、少しでも主婦の家事労働の軽減をはかっているとみなすことができるのではなかろうかと思う。

表8 「洗たく」の経験の有無と主婦の職業

		()は%				数字は指数			
主婦の職業	項目	洗たくをする		洗たくをしない		未習学児童		既習学児童	
		未習学児童(A)	既習学児童(B)	未習学児童(A')	既習学児童(B')	する(a)	しない(b)	する(a')	しない(b')
就 職		17 (12.1)	20 (12.9)	8 (16.3)	3 (7.7)	74	100	167	100
内 職		5 (3.6)	1 (0.6)	1 (2.0)	0 (0)	18	100		
自 営		13 (9.3)	12 (7.7)	5 (10.2)	2 (5.1)	91	100	151	100
無 職		105 (75.0)	89 (57.3)	34 (69.4)	28 (71.8)	108	100	80	100
無 答		0 (0)	33 (21.3)	1 (2.0)	6 (15.4)			138	100
合 計		140 (100)	155 (100)	49 (100)	39 (100)				

(2) 洗たく物の種類 児童が手がけた洗たく物の種類は、表9に示すとおりである。未習学児童・既習学児童ともに、「ハンカチ・手ぬぐい・タオル」が最も多く、次いで「くつ下」「下着のシャツ」「パンツ」「水着」などである。いずれも未習学児童よりも既習学児童のほうが実践率が高い。これは、既習学児童が5年生で「洗たく」の学習を終了していることに起因すること、また、児童の成長に2か年の差のあることをあらわしているものと思われる。「ブラウス」「まくらカバー」「給食の服装」などが、既習学児童のほうが未習学児童よりも実践率が低い、その理由については不明である。(表9)

2. アイロンの使用

(1) アイロンの使用の経験・頻度 アイロン使用の経験のあるものは、未習学児童・既習学児童ともにほぼ同じであるが、既就学児童のほうが未就学児童よりもやや多い。また、頻度については、「時々使う」が未習学児童・既習学児童ともに最も多いが、「たびたび使う」は

表9 洗たく物の種類

()は%

項 目	未習学児童	既習学児童
ア. ブラウス	57 (30.2)	44 (22.7)
イ. パンツ	42 (22.2)	71 (36.6)
ウ. 下着のシャツ	63 (33.3)	70 (36.1)
エ. スリッパ	42 (22.2)	49 (25.3)
オ. くつ下	67 (35.4)	109 (56.2)
カ. まくらカバー	44 (23.3)	33 (17.0)
キ. ハンカチ・手ぬぐい・タオル	95 (50.3)	106 (54.6)
ク. エプロン	44 (23.3)	46 (23.7)
ケ. 水 着	49 (25.9)	71 (36.6)
コ. 体そう服	31 (16.4)	47 (24.2)
サ. 給食の服装	39 (20.6)	35 (18.0)
シ. その他	18 (9.5)	30 (15.5)

表10 アイロンの使用の経験・頻度 ()は%

項 目	未習学児童	既習学児童
ア. たびたび使う	29 (15.3)	44 (22.7)
イ. 時々使う	72 (38.1)	67 (34.5)
ウ. めったに使わない	28 (14.8)	31 (16.0)
エ. ぜんぜん使わない	51 (27.0)	44 (22.7)
オ. 無 答	9 (4.8)	8 (4.1)
合 計	189 (100)	194 (100)

既習学児童のほうが未習学児童よりも多い。また、「ぜんぜん使わない」は、未習学児童のほうが既習学児童よりも多い。(表10) これは、家庭科学習の成果のあらわれと見ることはできるとはなかろうかと思う。すなわち、児童が本調査時期までに得た「アイロンかけ」の学習の機会(家庭科学習における)は、表11に示すとおりである。

家族構成・主婦の職業との関係をみるに、家族構成では、未習学児童・既習学児童ともに、核家族が最も多い。また、使用経験の有無についても、核家族が最も多い。すなわち、未習学児童では、 $\frac{A}{A'} = \frac{a}{b} = \frac{96}{100}$ 、既就学児童では、 $\frac{B}{B'} = \frac{a'}{b'} = \frac{120}{100} \therefore \frac{a}{b} < \frac{a'}{b'}$ 、既習学児童のほうが実践率が高い。(表12) 主婦の職業では、いずれも無職が最も多い。なお、「就職」については、未習学児童では、 $\frac{A}{B} = \frac{a}{b} = \frac{70}{100}$ 、 $\frac{B}{B'} = \frac{a'}{b'} = \frac{207}{100} \therefore \frac{a}{b} < \frac{a'}{b'}$ 、既習学児童のほうが実践率が高い。これは、職業に従事している主婦の家庭では、こどもが、少なくとも自分のものは自分ですることによって、主婦の家事作業に費やす労働力を、いくらかでも軽減しようとする生活態度が、うかがわれるように思う。(表13)

表 11 学 習 指 導 計 画

学習内容	学年	時 期	単 元	教 材	備 考
洗 た く	5	7月末～ 9月上旬	衣服の手入れ —せんたく—	下着（もめんパンツ類）	
	6		同上	化せんのカッターシャツ ブラウス	
	*5	* 9	同上		
アイロン 使用	6	7～9月	同上	手ぬぐい、ふきん	
	*5	* 9月	* 同上	* ハンカチ・エプロン 手ぬぐい・ふきん	* 洗たくの後の仕上げ
	*5	9～10月	* 便利なふくろ —ふくろ作り—	* 袋作り	* 製作時の仕上げ
	*6	7月	* 楽しいすまい	* のれん作り クレヨン染	* クレヨンの定着
しみ抜き	6	9月		ハンカチ しみの種類 しょうゆ、ソース、墨	実験的に扱う
	*6	* 9月			* 自由研究 児童数の½が参加
繕 い	5	5～6月		* ボタン付・スナップ付	針や糸・布を扱うことに 慣れさせる目的
	*6	* 9月		* ボタン付・スナップ付	

(注) * は附属桃山小学校

(2) アイロンをかける被服の種類 未習学児童・既習学児童ともに最も多いのは、「ハンカチ」である。未習学児童では、これに次いで「まくらカバー」が多く、既就学児童は「エプロン」「まくらカバー」が多く、いずれも平板でアイロンのかけやすいものである。既習学児童に「まくらカバー」「エプロン」が多いのは、5学年で教材として学習したためと推察される。「その他」としてあげられたものに、未習学児童では、「はちまき」「給食用のナプキン」、既習学児童では、「はちまき」「ふきん」「リボン」「タオル類」「くしゃくしゃになった紙」などがあり、いずれも平板なものである。また「手さげ袋」「パジャマ」「ジーパン」「スラックス」など平板でないものも多少あげられている。このことによって、児童の成長の2か年の差をみることができ、より高度な学習の可能性をも認めることができると思う。（表14）

3. しみ抜き

(1) 「しみ抜き」の経験・頻度 「しみ抜き」の経験のあるものは、未習学児童・既習学児童ともに、約70%である。未習学児童は、経験頻度の少ないもの（「少しはある」）が多く、既習学児童は、経験頻度の多いもの（「何度かある」）が多い。しかし、概して経験頻度は少ない。（表15）

家族構成・主婦の職業との関係をみるに、家族構成では、未習学児童・既習学児童ともに核

表 12 「アイロンの使用」の経験の有無と家族構成との関係

() は%

数字は指数

項目 家族構成	アイロンを使用する		アイロンを使用しない		未習学児童		既習学児童	
	未習学児童(A)	既習学児童(B)	未習学児童(A')	既習学児童(B')	する(a)	しない(b)	する(a')	しない(b')
IIO	12 (9.3)	9 (6.3)	4 (7.8)	4 (9.1)	119	100	69	100
OIO	29 (22.5)	29 (20.4)	11 (21.6)	12 (27.3)	104	100	75	100
OOO	0 (0)	1 (0.7)	0 (0)	1 (2.3)			30	100
IOO	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (2.3)				
OXO	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
IOX	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
IO	88 (68.2)	101 (71.1)	36 (70.6)	26 (59.1)	96	100	120	100
OO	0 (0)	2 (1.4)	0 (0)	0 (0)				
合計	129 (100)	142 (100)	51 (100)	44 (100)				

表 13 「アイロンの使用」の経験の有無と主婦の職業との関係

() は%

数字は指数

項目 主婦の職業	アイロンを使用する		アイロンを使用しない		未習学児童		既習学児童	
	未習学児童(A)	既習学児童(B)	未習学児童(A')	既習学児童(B')	する(a)	しない(b)	する(a')	しない(b')
就職	16 (12.4)	20 (14.1)	9 (17.6)	3 (6.8)	70	100	207	100
内職	4 (3.1)	1 (0.7)	1 (2.0)	0 (0)	155	100		
自営	12 (9.3)	12 (8.5)	5 (9.8)	2 (4.5)	95	100	189	100
無職	97 (75.2)	81 (57.0)	35 (68.6)	28 (63.6)	110	100	90	100
無答	0 (0)	28 (19.7)	1 (2.0)	11 (25.0)			79	100
合計	129 (100)	142 (100)	51 (100)	44 (100)				

表14 アイロンをかける被服の種類 ()は%

項 目	未習学児童	既習学児童
ア. ブラウス ワイシャツ	29 (15.3)	43 (22.2)
イ. スカート・ズボン	28 (14.8)	35 (18.0)
ウ. ハンカチ	109 (57.7)	122 (62.9)
エ. まくらカバー	39 (20.6)	42 (21.6)
オ. エプロン	27 (14.3)	54 (27.8)
カ. 体そう服	25 (13.2)	31 (16.0)
キ. 給食の服装	25 (13.2)	38 (19.6)
ク. その他	17 (8.9)	25 (12.9)

表15 「しみ抜き」の経験・頻度 ()は%

項 目	未習学児童	既習学児童
ア. 何度かある	49 (25.9)	62 (32.0)
イ. 少しはある	85 (45.0)	73 (37.6)
ウ. ぜんぜんない	53 (28.0)	58 (29.9)
エ. 無 答	2 (1.0)	1 (0.5)
合 計	189 (100)	194 (100)

家族が最も多く、主婦の職業については、両者とも「無職」が最も多い。(表16・17)

(2) しみの種類 未習学児童・既習学児童ともに余り行っていないしみの種類は、油・クレヨン・クレパスである。これは、油脂もしくは油脂を含むのであるから、その処理が他のしみに較べると比較的困難なためと解される。また、油脂類は、児童の日常生活には余り関係が深くないということも推察される。しかし、クレヨン・クレパスのしみにかぎり、児童らしい生活のあらわれとみることができる。「その他」にあげられたもので未習学児童・既習学児童共通のものは「血液」「接着剤」「歯みがき粉」などである。しみの各種類について、その実践率をみるに、未習学児童・既習学児童及び両者の関係については、前項「洗たく」「アイロンの使用」とは趣きを異にしている、いちがいに言えない。(表18) こうした結果の生じたのは、家庭科における「しみ抜き」の学習法が他の「洗たく」「アイロンの使用」などの学習と異なる点にあると推察する。すなわち、この学習の行われた時期は、6学年の9月(表11参照)、学習形態は、一部自由研究(附属桃山小学校児童一6年生一の約 $\frac{1}{2}$ がこの学習に参加している。)である。したがって、児童の全員が学習していないこと。また、一斉学習を行った学級(附属京都小学校)においては、指導者のこの題材に対する見解から、白布を用い、しょうゆ・ソース・墨のしみをとりあげて、実験学習を行っている。次に、本調査を行った時点では、学習終了の直後であって、学習した児童といえども、日常家庭生活で実践する機会にめぐりあうのに、期間が短いためとも思われる。また、「しみ抜き」が「洗たく」「アイロンの使用」などに較べて、処理の困難なこと²⁾も、こうした結果の生じた要因の一つではなからうかと思われる。

表 16 「しみ抜き」の経験の有無と家族構成との関係

() は%

数字は指数

項目 家族構成	しみ抜きをする		しみ抜きをしない		未習学児童		既習学児童	
	未習学児童(A)	既習学児童(B)	未習学児童(A')	既習学児童(B')	する(a)	しない(b)	する(a')	しない(b')
IIO	10 (7.5)	10 (7.4)	8 (15.1)	3 (5.2)	50	100	142	100
OIO	26 (19.4)	31 (23.0)	15 (28.3)	12 (20.7)	69	100	111	100
OOO	0 (0)	2 (1.5)	0 (0)	0 (0)				
IOO	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.7)				
OXO	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
IOX	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
IO	98 (73.1)	89 (65.9)	28 (52.8)	41 (70.7)	138	100	93	100
OO	0 (0)	3 (2.2)	2 (3.8)	1 (1.7)			129	100
合計	134 (100)	135 (100)	53 (100)	58 (100)				

表 17 「しみ抜き」の経験の有無と主婦の職業

() は%

数字は指数

項目 主婦の職業	しみ抜きをする		しみ抜きをしない		未習学児童		既習学児童	
	未習学児童(A)	既習学児童(B)	未習学児童(A')	既習学児童(B')	する(a)	しない(b)	する(a')	しない(b')
就職	15 (11.2)	17 (12.6)	10 (18.9)	6 (10.3)	59	100	122	100
内職	3 (2.2)	1 (0.7)	2 (3.8)	0 (0)	58	100		
自営	15 (11.2)	10 (7.4)	3 (5.7)	4 (6.9)	196	100	107	100
無職	100 (74.6)	79 (58.5)	38 (71.7)	37 (63.8)	104	100	92	100
無答	1 (0.7)	28 (20.7)	0 (0)	11 (19.0)			109	100
合計	134 (100)	135 (100)	53 (100)	58 (100)				

表18 「しみ」の種類

() は%

項 目	未習学児童	既習学児童
ア. しょうゆ・ソース	67 (35.4)	83 (42.8)
イ. 油	12 (6.3)	12 (6.2)
ウ. 墨 汁	50 (26.5)	67 (34.5)
エ. 水彩絵の具	63 (33.3)	62 (32.0)
オ. クレヨン・クレパス	14 (7.4)	10 (5.2)
カ. ど ろ	72 (38.1)	62 (32.0)
キ. おかずの汁	51 (27.0)	54 (27.8)
ク. のみもの (ジュース・コーラ etc.)	54 (28.6)	68 (35.1)
ケ. その他	9 (4.8)	9 (4.6)

表19 「繕い」の経験・頻度

() は%

項 目	未習学児童	既習学児童
ア. 時々する	58 (30.7)	91 (47.0)
イ. めったにしない	45 (23.8)	49 (25.3)
ウ. ぜんぜんしない	86 (45.5)	53 (27.3)
エ. 無 答	0 (0)	1 (0.5)
合 計	189 (100)	194 (100)

4. 繕い

(1) 「繕い」の経験・頻度

「繕い」の経験を有するものは、未習学児童・既習学児童ともに少ないが、未習学児童よりも既習学児童のほうが多い。(表19)

家族構成・主婦の職業との関係についてみるに、未習学児童・既習学児童ともに核家族が最も多い。未習学児童では、 $\frac{A}{A'} = \frac{a}{b} = \frac{104}{100}$ 、既習学児童では、 $\frac{B}{B'} = \frac{a'}{b'} = \frac{146}{100} \therefore \frac{a}{b} < \frac{a'}{b'}$ 、既習学児童のほうが実践率が高い。(表20) 主婦の職業については、未習学児童・既習学児童ともに「無職」が最も多い。「就職」の項では、未習学児童は、 $\frac{A}{A'} = \frac{a}{b} = \frac{58}{100}$ 、既習学児童は、全員が繕いを経験している。(表21) これについては、「アイロンの使用」で述べたと同様、こどもが家事作業の一部に参加しているとみることができると思う。

なお、「繕い」の経験の少ないものが、かなり多いことについての所見³⁾は、前報で報告したとおりである。

(2) 「繕い」の種類

「繕い」の種類については、未習学児童・既習学児童ともに最も多いのは「ボタンつけ」で、次いで「スナップつけ」が多い。この理由については既報³⁾のとおりである。なお、全項目にわたって、既習学児童のほうが未習学児童よりも実践率が高い。(表22) これは、「繕い」の学習が5学年の1学期(調査総人数の約 $\frac{3}{5}$ は附属京都小学校)及び6学年の9月(調査総人

表 20 「繕い」の経験の有無と家族構成

() は%

数字は指数

項 目 家族構成	繕いをする		繕いをしない		未習学児童		既習学児童	
	未習学 児童(A)	既習学 児童(B)	未習学 児童(A')	既習学 児童(B')	する(a)	しない(b)	する(a')	しない(b')
I I O	11 (10.7)	10 (7.1)	8 (9.3)	3 (5.7)	115	100	125	100
O I O	21 (20.3)	22 (15.7)	21 (24.4)	21 (39.6)	83	100	40	100
O O O	0 (0)	2 (1.4)	0 (0)	0 (0)				
I O O	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1.9)				
O X O	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
I X O	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
I O	70 (68.0)	104 (74.3)	56 (65.1)	27 (50.9)	104	100	146	100
O O	1 (1.0)	2 (1.4)	1 (1.2)	1 (1.9)	83	100		100
合 計	103 (100)	140 (100)	86 (100)	53 (100)				

表 21 「繕い」の経験の有無と主婦の職業

() は%

数字は指数

項 目 主婦の職業	繕いをする		繕いをしない		未習学児童		既習学児童	
	未習学 児童(A)	既習学 児童(B)	未習学 児童(A')	既習学 児童(B')	する(a)	しない(b)	する(a')	しない(b')
就 職	11 (10.7)	19 (13.6)	16 (18.6)	0 (0)	58	100		
内 職	4 (3.9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				100
自 営	13 (12.6)	9 (6.4)	5 (5.8)	5 (9.4)	217	100	68	100
無 職	75 (72.8)	86 (61.4)	64 (74.4)	31 (58.5)	98	100	105	100
無 答	0 (0)	26 (18.6)	1 (1.2)	17 (32.1)			58	100
合 計	103 (100)	140 (100)	86 (100)	53 (100)				

数の約 $\frac{2}{5}$ は附属桃山小学校一表11))に行われていて、その要因の一つとして学習の成果のあらわれではなかろうかと思われる。

表22 「繕い」の種類 ()は%

項 目	未習学児童	既習学児童
ア. ボタンをつける	61 (32.3)	100 (51.5)
イ. スナップをつける	37 (19.5)	75 (38.7)
ウ. あなをつくろう	28 (14.8)	44 (22.7)
エ. かぎざき	12 (6.3)	16 (8.2)
オ. 布の弱った部分にあて布をして...	13 (6.9)	15 (7.7)
カ. スカート・ズボンのすそのほころび	30 (15.9)	50 (25.8)
キ. その他	21 (11.1)	26 (13.4)

ちなみに、筆者が、静岡市立小学校を対象として行った同調査の結果^{2,3)}(住宅地域・既習学児童一6年生)と本調査における既習学児童のそれとを比較してみると、いずれも同一傾向を示していることがわかり、興味あることと思う。

IV 結 語

1. 「洗たく」「アイロンの使用」「しみ抜き」「繕い」などについて、児童の家庭生活の実態調査を行った。
2. 実践率は、未習学児童(4年生)・既習学児童(6年生)ともに「洗たく」「アイロンの使用」のほうが「しみ抜き」「繕い」よりも高い。
3. 「洗たく」「アイロンの使用」の実践率は、未習学児童・既習学児童ともに、ほぼ同様である。
4. 「しみ抜き」「繕い」の実践率は、既習学児童のほうが、未習学児童よりもやや高い。
5. 全体を通じて、既習学児童のほうが未習学児童よりも実践率は高く、これは、家庭科学学習の成果の一部のあらわれとみることができるのではなかろうかと思う。

本調査研究を行うにあたり、ご便宜とご助言を賜りました、京都教育大学附属京都小学校長水山高幸教授・同附属桃山小学校前校長末利博教授に心から厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 清水 歌：京都教育大学紀要A(人文・社会)：第42号，昭和48年，家庭科教育と小学生の家庭生活の実態に関する研究 p. 69～73.
- 2) 同上：同上 p. 98, p. 110～114.
- 3) 同上：同上 第44号，昭和49年，同上 p. 56.

Summary

The questionnaire was examined about the unlearning and the learning schoolchildren to know how much homemaking education influenced both the children in the daily life. The items in homemaking education were selected from the viewpoint of the importance of their life. The investigation was carried out in the schoolboys and girls of the forth and the sixth grades in Primary Schools Attached to Kyoto University of Education by using the questionnaire method (383 children in all).

The results obtained on “clothing” were as follows.

1. The investigation of the actual home-life of the schollchildren was carried out on “washing”, “ironing”, “taking out a stain”, “patching” and so on.
2. The rates of the practice in both cases of the unlearning and the learning children were higher on “washing” and “ironing” than on “taking out a stain” and “patching”.
3. The rates on “washing” and “ironing” were the same in the unlearning as in the learning school-children.
4. The rates of “taking out a stain” and “patching” were higher in the learning children than in the lunearning.
5. The rate of the practice was throughout this investigation higher in the learning children than in the unlearning, which is supposed to be caused by the influence of homemaking education.